

猫のいる風景

全編100枚書き下ろし予定

400字詰原稿用紙 全編100枚書き下ろし
平成十七年十月十七日脱稿

第二話 ジャズを聴く猫 たなか 踏基

冷まじくジャズ聴く猫と閨におり・踏基

物書きの荒木聡は、三年前に妻を癌で亡くした。何時の間にか、男やもめ暮らしの疲れのよくなものが、翳りとなって溜まるようになっていた。妻の逝去以来、何時もアメリカン・トヘア(略してアメショー)の愛猫のおお介と一緒に抱いて寝るのが習慣となった。

物書きと言っても小説家ではない。若い頃は少し小説も書いたが、今は自称ノン・フィクション作家であり、ルポライターであった。つまり何でも屋の雑文書きである。時には、雑誌社の企画部に記事を書いたり、簡単な文庫本を執筆したりして暮らしていた。

アメショーの愛猫 おお介 は、仔猫の時は亡妻の愛猫であった。血統書付きの猫から産まれたと言って、妻の学生時代の俳句仲間の人友の家から貰われたきた。だから仔猫の時代はむしろ、妻になつて育った。足音で、階下にいる妻の行動の全てを察知した。

成猫になって、ようやく荒木聡の家族の分担や序列を理解するようになった。主人の存

在を意識してか、時々荒木聡からも餌を強請った。何処を彷徨するのか おお介 はついと

旅にでると、二、三日家出をすることもあった。別に妻が亡くなってから、恋しがって外出の頻度が増えるようになった訳ではない。

でも近頃では寝心地が悪いのか、それとも荒木聡の躰が煩いのか、おお介 は何時の間にか添い寝を嫌がるようになっていた。

仔猫の時代、妻不在の折等は、添い寝をしてしばしば面倒みてやったのに、昔の恩を忘れたのか? おお介 が夜中に寝室を抜け出すようになった。猫のおお介 の体温でも傍から離れてしまうと、冬は閨が何だか物足りないようでスカスカした気分になった。

そうした最近猫との同衾不在も原因してか、荒木聡は、ときおり深夜に眼が醒めるようになっていた。特に、就寝前に酒を飲んだ日が多い。膀胱が排尿の衝動を感じ、注意を喚起するある種老化現象の兆しであろうか?

その日も、荒木聡は焼酎のお湯割りを多目に戴いて床に就いた。午前二時を廻るころ、ふと目覚めてまたトイレに起きてしまった。

何気なく点けた、NHKBS衛星第2放送か

ら、聞き覚えのサウンドが流れてきて、大きな森に囲まれた丘陵の画像が映し出されていた。

「これはジョージ・ガーシュインだ!」
ジャズに左程詳しくない荒木聡でも、ガーシュインの曲は聞いたことがあったからだ。

広大な森の一角に切り開かれ、緑色の屋根をした異国の野外円形劇場にカメラはパンで寄って行った。如何にも猫族っぽく背を揺する仕草、髪を掻き揚げて首を傾けながら棒を振る、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の指揮者こそ、まぎれもなき「世界のオザワ」小澤征爾その勇姿に間違いなかった。

丘には、思い想いの姿勢でくつろぐ、二万人以上の群集がいた。カメラは、一家総出でピクニック・バスケットやクッションに毛布等を持参、幼い子供に犬や猫のペットを交えて憩う、老若男女の姿を映し出していた。

それが、ベルリン郊外で今大人気のヴァルトビューネ野外音楽堂であると後で知った。

曲目は、小澤征爾指揮ベルリン・フィルの「パリのアメリカ人」である。

それにしては、バックの管弦楽団に比べて、丸いスポットライトの中、ステージ全面のドラムセットとグラランドピアノ、コントラバスが静かに置いてあるのが奇異だった。

程なくその楽器の準備の意味が、ジャズとの共演だと荒木聡には理解できた。三人の黒人演奏者が、晴れがましく舞台の袖で出番を待っている姿を、カメラが映し出したからである。

一曲目を終えて退場した小澤征爾が、今度は、一人の黒眼鏡の黒人の腕を取るようし、付き添いながら舞台上に再登場してきた。

小澤征爾の介添えで、ピアノの前に立ち、ピヨコンと深くお辞儀した演奏家は、はじめ背の低い華奢な男にみえた。

あとに従う二人はベースのローランド・ゲリンとドラマーのジェイソン・マルサリスで、ピアノの前に誘導された盲目の演奏家こそ、マーカス・ロバーツその人であった。

二曲目は「ラプソディ・インブルー」で、あの独特のクラリネットのグリッサンド奏法で曲は始まった。ジャズとクラシックの熱い融合、正にマーカス・ロバーツのジャズピアノトリオ(以下Pトリオ)とベルリンフィルの間に繰広げられた、丁々発止の興味深い共演、いわゆるジャム・セッションであり、ウィーン国立歌劇場音楽監督の「世界のオザワ」の心憎い粋な演出でもあった。

曲目は次の順序で演奏された。

パリのアメリカ人(管弦楽)

ラプソディ・イン・ブルー(共演)

ピアノ協奏曲へ長調(共演)

コール・アフター・ミッドナイト(Pトリオ)

ストライク・アップ・ザ・バンド(管弦楽)

アイ・ガット・リズム(Pトリオ)

ベルリンの風管弦楽 作曲:パウル・リンケ

初夏の如何にも気軽なベルリン風物詩のごとき、日没前後の時間を挿んで進行する

コンサート、ドイツの森の野外劇場に織り成す幻想的な光の彩、森の木々のさざめきと群集の中で明滅する蠟燭の灯り・・・。

それは、日本ではとうてい考えられない、ある面甘美でロマンティックな雰囲気の中で進行する、荒木聡にはとても羨ましいほどの贅沢な野外音楽会に思われた。

もちろん、最初は今夜も例のごとくアメリシヨの猫 おお介 は、一晚中外出したまま不在であろうと思っていた。恋人の猫を探して一体何処を徘徊しているのやら?・・・

と心配していると、ご当人の おお介 が、突然寢室のドア下に取付けた、猫専用のくぐり戸口から、のっそりと戻ってきた。

曲が三番目の共演「ピアノ協奏曲へ長調」

に移行した頃であったかもしれない。そしてやおら、荒木聡との閨の温もりを懐かしむように、寢床に潜り込んでくると一緒にTVのジャズに耳を傾け始めたのである。

「どっした おお介 お前も一緒に聴くか?」

「・・・」

「何時ものお前の恋人に振られてきたのか?」

「・・・」

「おまえ今夜もすねているのか?」

確かに おお介 は、ニヤンとも言わずにジャズを聴いていた。それが証拠に真剣な様子で おお介 は、くるくる廻る耳を、TVの画面に向けていたからである。

猫の聴力は、人や犬が感知できない20

KHz〜MHzの超音波領域の音を聞分けられるという。人の五〜十倍の能力で、猫は独自の感知能力の世界を生きている。

イルカや蝙蝠も自ら超音波を発し、反射してくる魚や昆虫を捕らえる。イルカの場合、15〜160KHzで、蝙蝠は12〜200KHzの感知能力に比べ、猫の能力は、はるかに優れているのである。

人は半音を聞分けるが、猫の場合は低周波領域の半音を聴き分け、高周波領域では半音はおろか、四部音〜五部音いや十部音もの繊細で微妙な変化を聞分けるという。然も、二十ヘル以上離れた場所にいる、鼠の微かな超音波の音さえ感知するという。

久し振りに同衾のアメリシヨ おお介 は、気持ちよさそうに、人の聴こえないジャズ音を愉しんでいるかの如く眼を瞑っていた。荒木聡は、猫の頭を擦ってやりながら、じっとTV画面を寢床から眺め続けたのである。

荒木聡は、この指揮者小澤征爾を観る度に、何時もこの男はきつと猫族に違いないと思うのだった。先ずタクトを振る仕事猫である。

Pトリオとベルリンフィルの共演では、時にジャズがクラシックを呑み込む場面を観た。マーカス・ロバーツの鍵盤上を走る指からまるで、野生の猫が踊るような自由奔放な即興の調べが無限に弾きだされた。

時に、哀しみの霧で覆い尽くような調べが一転、繊細なコア色した指の二重奏に変わる。

まるで手の指が、身体から独立した別の生き物のように踊り狂う。鍵盤は柔らかな雲のたなびく空になり、その上で仔猫が黒鍵と白鍵の間で寝転んだり、雲を蹴散らして駆け回ったりする。ひたすら頭を擡げて姿勢を崩さず、黒いサングラスの向こうを見詰め、自ら秘めた魂に突き動かされるかのごとく、彫刻のような筋張った手首が撓って動いている。

広い野外会場で熱狂した聴衆は、口笛を吹き全盲のジャズピアニストの演奏を讃えるように呼応した。ジャズの独壇場、クラシック管弦楽の限界をそこに感じさせていた。

しんとした寝室の中をジャズが流れた。

ポトリオの独壇場は、ジャズの名曲「アイ・ガット・リズム」でも遺憾なく発揮された。

愛猫の おお介 も、身じろぎもしないで曲を傾聴した。荒木聡は、盲目のマーカス・ロバーツが、憂いを帯びた華奢な身体付きからはみだすほどの偉大な巨人に思えてきた。

しかし最後は、流石にクラシックも見事に巻返していた。何といっても聴衆を酔わせたのは、圧巻「ベルリンの風」である。

聴衆は猫族代表の「世界のオザワ」に促されるように、猫や犬を抱きながら、全員が総立ちとなって、曲に合わせて足を踏み鳴らし、手拍子をとりに指笛を鳴らし、子供を肩車して場内を踊り回った。あたかも、ドイツの夜の帳の中で、二万人を呑み込んだ『深い森の舞台』全体が、歓喜と興奮の坩堝と化して大き

く揺れていたからだ。

ジョージ・ガーシュイン（一八九八―一九三七）と言えば、クラシック、舞台演劇、ポップス界を股にかけて活躍したアメリカが生んだ大作曲家である。ラグタイムからジャズへの黒人音楽をこよなく愛し、一九一九年「SMITH SWINER」の大ヒットが転機となって世に出た人として知られている。

トイレついででの起床であったが、かくして深夜の午前二時から未明四時まで、二〇〇三年六月二十九日収録の野外コンサート映像を、荒木聡は感涙しながら、猫の おお介 と観るはめとなった。一日に十四、五時間は寝るはおお介 は、未明には熟睡していた。

早朝新聞で確認すると、やはり「ピクニックコンサート」と番組欄に記されていた。二週間後、荒木聡は、某ヤングアダルト向け雑誌のコラム執筆の仕事で、横濱に取材に出掛けた。横濱のジャズについて、何かコラム記事を執筆してくれとの依頼を受けたからだ。

横濱の本牧近くのパブのオーナーでもあり、元ジャズメンのジョージ・寺岡という男を編集担当者から事前に紹介されていた。担当者の電話によると、パブのオーナー寺岡には、「横濱JAZZ」の著書もあり、「横濱ジャズの生字引のような人」の由であった。

濱で鳴らした、元「ビッグ5」メンバーのピアノ弾きの寺岡が、古いチャブ屋を買取り、改装後は濱で知られたパブレストランにした。セロニアス・モンクの Round Midnight)や

ブルーベックの Take Five は寺岡の得意曲である。JAZZ専門誌に依頼され時折、評論記事を執筆することもあったが、最近では白内障を悪化させ、黒眼鏡を掛けるようになった。パブの一角に、アップライトピアノが一台置いてあり、その横にハイハット（足踏みシンバル）が無造作に並んでいる。興に乗ると寺岡が、ビ・バップやブルー・ノートのピアノを弾いて昔の技を披露する・・・と。

荒木聡は、ジャズピアニストのマーカス・ロバーツの演奏をTV映像で観ていたのので、逢う前から、ジョージ・寺岡なる人物に興味を抱いた。寺岡は日本人であったが、同じ黒眼鏡をしている点でも共通点があった。

荒木聡は、簡単に名刺を出し、来意の趣旨を伝えると、先日のポトリオとベルリンフィルの共演映像の話を、面談の口火とした。

「拙宅で猫と一緒にジャズを聴いたのです・・・」「そうですね・・・それは面白いですね。実はジャズと猫は大いに関係があるのでですよ。

『Cat's』は Jazz Fan/Jazz Musician を表す、米語のスラング（俗語）であることご存知でしたか？・・・それも唯ファンでなく、熱狂的な・・・幾分オタク的と言うか、ファンキーな意味あいでもう呼ばれるのです」「そうですね。知りませんでした。その件を私も書かせて戴いて宜しいでしょうか？」「かまいませんよ。ついでに申上げますと『ミックバンド』ハナ肇とクレージーキャッツ』名の、『Cat's』は、文字どおりその

意味で名付けられ、元は、昭和五十五年の『キューバンキャッツ』名で旗揚げでした」
 「興味深い話を伺いました」
 「ハナ肇も、『ドリフターズ』のいかりや長介も東京生まれですが、横濱にも縁のあった、濱出身といっても良い位のジャズミュージシャンでありコミックの元祖ですよ」
 そう言いながら、ジョージ・寺岡が黒眼鏡の奥で笑いながら教えたくれた。
 以下は、オーナー寺岡の話である。

* * *

横濱が、日本ジャズ発祥の地として、約五十年間ビートを刻んできたことは異論がないであろう。日本のモダンジャズの原点は、昭和十九年伊勢佐木町二丁目の「モカンボ」での演奏と、昭和八年開業の野毛のジャズ喫茶「ちくさ」から発祥したと言っても過言ではないという。

寺岡が、横濱舞台の著書「横濱JAZZ」を、ある雑誌に架空の語りの主人公を設定して三回連載した時、若い読者から主人公のモデルを問われたことがある。

その時寺岡は、特定のモデルは居ないと応えたが、同じジャズパブの経営者でかつ「横濱JAZZ」の愛読者の一人猫仙人を名乗る、濱の旧友が適切な提案を呉れた。

主人公の活躍した時代の雰囲気、最近の若い読者に解り難いので、横濱のジャズの歴史の代表例として、著書が重版の時に伝説的なジャズクラブ「モカンボ」を紹介してみたかどうかという助言だった。

確かに遡れば、ジョージ・ガーシュインの曲が、大正十四年には既に伊勢佐木町の芝居小屋で演奏されたと言うし、ポール・ルムダンス(社交ダンス)が盛んになり、鶴見の花月園や海岸通り20番地のグランドホテルで、スウィングジャズバンドの演奏もされたようだ。ダンスホールに女性が沢山いた本牧のチャブ屋でも、大正昭和初期にラグタイムの野卑なピアノが、踊子のために鳴っていたに違いない。

客は、ジャズを聴きに来た訳ではなく、唯チャブ屋の淫靡な雰囲気を楽しみに来たに過ぎない。もっと正確に言うなら、ジャズ風ピアノ曲やレコードが、ダンスに潜っていた時代であり、踊子の嬌声に合せ音楽が伴奏を務めていた時代でもあった。だからとても日本のジャズの誕生とは言えない時代である。

それは、寺岡連載の飢えた野良猫のような語りの主人公が、本牧「霧笛」を根城にして、ジャズの修行をした時代から遙に昔の話である。

昭和二十三年、米軍が沢山横濱に滞在するようになると、専用クラブでビ・バップが持て囃され盛んに演奏された。

この頃になると、日本人演奏家もアルバイト的なキャンプの日雇いミュージシャンとして結構誕生してくるのである。そうした日本人が、横濱港に上陸のレコードや、軍クラブから流れ出た譜面をコピーして、器用にジャズを演奏した。

かくしてそれまでの、デキシージャスウィングジャズ風のダンス音楽全盛時代から移行すること十数年後、皮肉にも日本の第二次大戦の敗戦により、横濱進駐軍のキャンプから、やっと日本のモダンジャズの黎明期が幕を開けたのである。

マッカーサー元帥が、一時ニューグランドホテル315号室に滞在し、現在の山下公園に軍隊を野営させ、やがて約9万人の米軍を横濱に駐屯させたからこそ、日本にモダンジャズが根付いたとも言えるのである。

何れにしても、未だ外国人演奏家に敵わなかった時代で、日本のモダンジャズは、未だ物真似の域を脱し得ず、外人演奏家から擲擲されていた。

「孤高の天才」といわれた天折のジャズピアニスト、守安祥太郎の仲間と共に、日本人の手になる初のジャム・セッションが、伊勢佐木町のクラブ「モカンボ」で行われた。

これが後日、昭和二十九年七月二十七日「幻のモカンボ・セッション」の名盤となって残された。日本ジャズ創世記の貴重な録音と言われている。守安祥太郎(P) 宮沢昭(TS) 鈴木寿夫(B) 清水潤(DS) 渡辺明

(AS)が当時のメンバーである。しかし守安祥太郎の活躍は、昭和三十年までである。この年、東京目黒駅で電車で飛び込み自殺を図り、三十一歳で不帰の客となったからである。

クラブ「モカンボ」のセッションは、オーナー植木幸太郎が、ジャズメンに勉強の場

を提供せんと、週に一度夜中に店を開放した

ことに端を発している。このオーナーも、横濱銀行の支店長をやりながら、本牧でチャブ屋も経営したという今では考えられない傑物であった。始めは無料だったが、人気ができるに従って混むようになり、当時コーヒー代が40円の時代に、これまた破格の入場料300〜500円をとった。最も、某ドラマーの復帰カンパの意味合いもあったという。

司会はクレージーキャッツ旗揚げ前の八ナ肇で、植木等もこれに関係している。

演奏は、深夜十二時から朝まで続いたという。他の日本人セッションメンバーは、澤田駿吾(G)五十嵐明要(As)杉浦良三(Vib)秋吉敏子(P)渡辺貞夫(As)等の面々であった。こうして伊勢佐木町「モカンボ」からの日本のモダンジャズ界を背負って立つ超一流の演奏家が輩出し、キャンプから来る進駐軍のプロ演奏家との共演も実現したという。

野毛にある日本最古のジャズ喫茶「ちぐさ」も昭和八年開業であるが、若い渡辺貞夫や秋吉敏子、日野兄弟が毎日のように通った。

横濱ジャズと縁ある人に、名古屋出身の外科医内田修がいる。「モカンボ」でピアノを演奏した、守安祥太郎にも、学生時代に可愛がられた人である。今でも渡辺貞夫他の一流ジャズメンとの親交も古い。内田修に見出され育てられたジャズ奏者は数知れない。米国で活躍してきた、大西順子や綾戸知絵等の女性演奏家達もそうである。ある意味で、日本ジャズ界の育ての

親の一人と言えるかもしれない。

横濱には、当時「モカンボ」以外にも「ハイレム」「ゴールデンドラゴン」「ゼブラ」「クリフサイド」「チャイニーズクラブ」「シーサイド」「オリンピック」等『Cat's』出入のジャズクラブが幾つかあった。

連載の「横濱JAZZ」では不良少年上りの主人公(As)が、「ジロウ&トップ5」を率いて活躍した、本牧「Togor(霧笛)」、伊勢佐木町「葵苑」や代官坂「ベイサイド」も、元を辿ればきつとこれ等のジャズクラブのどれかと重なるはずである。お洒落でファッショナブルな街というより、進駐軍や非行少年の跋扈する荒くれた時代の横濱にこそ、熱いジャズが似合ったのかもしれない。

「モカンボ」は既にありませんが、お帰りに野毛の「ちぐさ」にもお寄りになってみては如何ですか？創業者の吉田衛氏は亡くなつて、妹の孝子さんが店を引継いでいます。電話入れておきますよ。」

「そう致します。有難うございました。」荒木聡が感謝して、ジョージ・寺岡の店を辞したのは、既に午後六時を過ぎていた。初対面にも拘らず、二時間近く時間を割いてくれたのである。その日、珍しくアルコール無し、伝説のジャズ喫茶「ちぐさ」に立ち寄り、帰宅したのは最終電車に近かった。荒木聡は、良い記事が書けそうな予感がして嬉しかった。

荒木聡は、「横濱ジャズ散歩」という記事を

書き、メールで担当者に送付し一段落していた。

ふと先日深夜の光景を想い出していた。世間一般の猫は、一体ジャズを聴くものだろうか？と思い始めた。ジョージ・寺岡は、『Cat's』は、俗語でジャズフリークを意味すると言っていたが、少なくともあの夜、アメシヨの愛猫 おお介 は、確かにその音を聞きつけて、自ら聴きに帰ってきたような気がしたからだ。

眼を細めて一緒に聴いていた、あの行動は、普通の行動では無いのでは？それは猫にとつて、極めて特殊なのではないだろうか？ひょっとすると亡妻の行動と関係があったのではないだろうか？そんな疑問に駆られた荒木聡は、事例を確かめてみたくなって、おお介 係り付けの獣医師に電話して尋ねた。返ってきた猫の能力の解説の応えは、荒木聡の知っている内容で、疑問を解消するまでに至らなかった。

「TVに猫だけが聞分けられる音や好みの映像があつたのかもしれないね。猫の聴力は、人が聞こえない超音波領域の音を感じることが出来ます。視力は逆に人の十分の程度ですが、動体視力は逆に優れていて視野も広く、鼠や小鳥の発する微かな鳴き声や動きを察知できます。網膜の後ろが反射鏡のようになっている、僅かな光を網膜上で増幅する機構となつて居るので、暗闇でも人の六分の一の光を感じて狩ができます。」

「亡くなった家内が、猫を連れて何回か、伺つたと思いますが、何か猫がジャズを聴いた事例とか、特別の音に興味を示すと

かの話をしたことは無かったでしょうか？」
 「いいえ！そんな話はされませんでしたよ。でもそんなに気になるのでしたら・・・ひとつ実験してみましようか。準備できたらお電話しますので、荒木様の おお介君を連れてきてください。奥様が身に付けていた物をその時ご持参下さい」
 荒木聡は、二週間前の深夜TV放映された、タイトル名「ヴァルト・ユネ2003カー・シナイナイト小澤征爾」のDVDを、獣医師から連絡あるまでの間に、ビデオ屋で態々購入した。自宅で、同じ映像を愛猫 おお介に見せて、再現実験を試みる目的であった。寝室に おお介 を餌で釣って、連れ込んだの再現実験は完全に失敗であった。僅かに「ラプソディ・インブルー」で、あのクラリネットのグリッサンド奏法で音がせり上がる部分に、ピクリと身体を揺すった以外は無反応であった。妻が生前着ていたパジャマを置いてみたりもしたのであるが・・・

学から借りたと言って、徐に おお介 を持参の妻のエプロンで包んで台に乗せた。能力は犬より劣るものの、猫の嗅覚細胞の数は人の二倍、嗅ぎ別ける能力は数万倍あるという。一番身近な飼い主の衣類に、猫だけに感ずるニオイ付けをやっている筈・・・こうすると安心して、診察しても暴れないのだと言うのが獣医師の意見であった。
 一応、獣医師から おお介 の健康状態に関する問診があった。でも実験は期待外れであった。特殊な猫用？のレシーバを付けさせて、猫の低周波、超音波領域の反応を調べたにしては、常識的な結果に終わったからだ。
 「奥様は、声は高い方でしたか？」
 「そうですね。良く金切声で猫を叱ってました。コーラスのパートはソプラノだったと聞いたことがあります」
 「奥様の声を記憶しているようですよ」
 人が感知する音域では、3〜6kHzに敏感に反応すると言っ診断を獣医師はくだした。診断料を支払って、動物病院をでた。荒木聡は、どうしてもあの夜のジャズに耳を傾けた おお介 の謎を探りたかった。可能なら、仔猫をくれた学生時代の俳句の友人や、妻の旧友に逢って話を聞いてみれば、妻の婚前の青春の一端とジャズ、結婚後の猫とジャズの接点、がヒョットすれば探せると思いついたのである。
 しかし、皆男やもめに同情して荒木聡と逢ってはくれたが、妻が結婚する以前の学生時代、ジャズに触れた形跡もなければ、血統書付きで生まれた おお介 の兄弟達に、特別な音にたいして敏感な、ましてジャズ

を聴く趣味？のある猫が存在していることもないことが判明しただけで、全て面談の試みは徒勞に終わったのである。

その後、アメシヨアの愛猫 おお介 が、何の音もしないのに、突然寝ていた半身をもたげ、前足を踏ん張り緊張した面持ちで、くるくる回る耳で、あの音を聴く光景を、荒木聡は二、三度目撃したことがある。その時、猫のジャズが何処かで鳴っていたのだろうか？

最近では、やたらに超音波の発生源が巷にあふれている。曰く医療用の超音波診断装置、超音波洗浄器、超音波風呂、はては鼠や犬猫の嫌いな忌避剤に代わる機械まで・・・都会では人には感じられない、猫にとって傍迷惑な、超音波騒音があふれているに違いない。

子供達が家を出て、二人きりの生活が始まった頃、ペット可のマンションに転居しようかと妻から提案されたことがあった。でも結局、妻が亡くなるまでこの戸建の家で、猫の おお介 を十年以上飼ってきた。亡妻の命日に再度、 おお介 の拳動を観察しようと、荒木聡は心に決めていた。

第二話 了

妻の忌に猫てふジャズの店の栗・・・踏基

参考文献

「そして風が走りぬけて行った」植田紗加菜著 講談社
 座談会 横濱はダンスのメッカ①②③ 有隣第391号
 座談会 ジャズの街 横濱①②③ 有隣第443号
 『ドクターJAZZ 内田修物語』高木信哉著 三三書房
 『猫、この知られざるもの』ジョエル・ドウハッス著

(塚田導晴訳) 中央公論新社